

## 「感情のメモワール」

小林 くるみ

数分、電車に揺られていると、向かいの車窓に水平線が覗くようになった。力強い朝日に照らされた海は、紺碧というより、むしろ白く光り輝いて見える。積み上げられた消波ブロックの歪な線と、その隙間から覗く、なだらかで美しい白線。間近には捉えられない地球の輪郭を、今日も錆びた窓越しに観測した。

この光景を独占するために、いつも、一つ前の駅まで歩いて電車に乗る。客観的に見ればそれはただの遠回り、すなわち通学時間を無駄に増やす行為であって、当然のことながら、周囲から共感や理解を得たことは一度もない。視界いっぱい広がる壮大な海原ならばまだしも、「消波ブロックの隙間から覗く水平線」なんてマニアックな景色を好む女子高生は、おそらく私以外にはいないからだ。港街で育った彼女達、もしくは彼女達にとって、それが別段珍しい光景ではないからというのもあるいは理由の一つなのかもしれないけれど、珍しくないからといって、美しいと思わないわけではない。見飽きるほどに見てきた海であつても、日の出や日没、あるいは月の綺麗な夜なんかには、足を止めて海を見つめる人の姿が見受けられる。にも関わらず、私の行動に皆が首を傾げるのは、やはり私の趣味嗜好が、他の友人とは少し異なっているからなのだろう。

海沿いの街をぐるりと一周する、一両編成の環状電車。街の西側にそびえる山と東側に横たわる海とを繋ぐ、この街唯一の移動手段。けれど、そもそもその人口が少ないためか、俗に言う満員電車ほど混雑しているところを見たことがない。一般に通勤ラッシュと言われるであろうこの時間帯でも、それは例外ではなかった。年季が漂うこじんまりとした車内には、私以外の人影はない。十数人に満たないクラスメイトが乗り込んでくるのはもう三つほど先の駅で、サラリーマンが待っているのはもっと先、私達が降車する次の駅の話だ。そこをすぎると中心街になる。ついでに言うならば、私がいつも乗車する駅は、この中心街のほとんど対極に位置していた。つまるところ、田舎の中でも際立って田舎と言っている場所が私が普段利用している駅なのであって、周囲にこれといった施設もなく、自動販売機すら置かれていない、ほとんど山中と言っている駅までわざわざ歩いて行って、朝のひとときの光景と独特の匂いに満ちた車内を独りじめしようなどと画策する人間は、やはり私以外にはいないのだった。

次第に消波ブロックの密度が低くなり、視界に占める青の割合が多くなる。緩やかになっていく景色のスクロールが、本来の最寄駅が近いことを知らせていた。——少し前までは、もう二駅分、この車内は私だけのものだった。

甲高いブレーキ音を鳴らしながら、電車が停止する。車両の前と後ろに一つずつあるドアが開いて、後ろ側から、一人の少女が乗ってきた。私と同じ制服に身を包んだ、黒縁眼鏡の似合う彼女。ローファーを鳴らしながらこちらへ歩いてきた彼女は、その丸い頭で、車窓の景色を遮った。当然のように私の真向かいに鎮座し、高校指定のローファーで飾られた脚を組む。黒瑪瑙みたいに真つ黒な瞳と、凸レンズ越しに目が合った。

「おはよう、瀬波。」

「おはようございます、先輩。」

今日も幸薄そうで何より、と先輩は微笑み、私は左に首を傾げた。名前も知らない先輩との、いつも通りの会話の応酬。小さな車両の端と端、およそ一メートルの間隔を開けて、縮まることも離れることもないふたりの距離。

私が先輩と呼ぶ彼女こそが、わざわざ私が、一駅余分に歩くようになった原因だった。中心街までは私の世界だったこの電車に先輩が乗り合わせるようになったのは、十数日ほど前のことだ。扉が閉まる寸前に乗車してきて、スカートの折れ目を気にしながら、私の向かいに座った彼女。面識もなく、どこるか名前も知らず、当然言葉を交わしたことなどなかった私に、彼女はにっこりと微笑んだ。

「おはよう、瀬波。」

出欠を取る先生みたいに事務的に、肩を抱く旧友のように親しげに。まるでもう何年もそうしているかのようになり、ごくごく自然にそう言った。人懐っこい笑みを浮かべて。

はじめは人違いかと思ったけれど、瀬波というそう多くもない苗字は紛れもなく私のもので、私を兄や母、あるいは父と間違えているとは到底思えなかった。とはいえ面識のない人物が一方的に私を知っていたとは思いたくない、と、居住まいを正して口を開く。かけている眼鏡の度が合っていないのかもしれないし。

「あの。私、瀬波綾ですよ。」

「うん？ うん、そうだね。知ってるよ。おはよう、瀬波。瀬波綾。」

どうやら面識のない人物は一方的に私を知っていたようで、彼女のリアクションはといえば、組んでいた脚を逆に組み直したただけだった。むしろ私がフルネームを告

げたことに、不思議そうに首を傾げている。あそこに浮かんでいるのは雲ですよと、わざわざ教えられた通行人のような顔で。

話が読めず困惑する私の頭に、ふと、一つの考えが浮かんだ。もしかすると彼女は、不審者と呼ばれる部類の方なんじゃないだろうか。もつと言うと私のストーカーのようなことをしている人で、だから私の名前や乗ってくる駅を知っていて、二人きりになった今を好機だと思つて、声をかけてきたんじゃないだろうか。

だとすると、どうしよう。下手に刺激すると、殺されてしまうかもしれない。

今から思い出してみればでんで突飛で支離滅裂で意味がわからない、色眼鏡に色眼鏡を重ねたような思考回路だけれど、あの時の私の頭の中はパニックに近かった。当たり障りのない言葉で会話を終わらせてたくて、でも不審者にとつての当たり障りのない言葉で何だ、こつちも向こうの名前を当てればいいのか、なんて思っているうちに、向こうのほうで口を開いていた。

「もしかしてきみ、フルネームで呼ばれるのが好きだったりする？ 私としては瀬波という呼称がそこそこ気に入っているんだけど、でもきみがそう呼んでほしいって言うんだったら、きみのこと、瀬波綾って呼ぼうかな。わざわざきみの嫌がる呼び方をするのは、私としても本意ではないしね。」

てつきり彼女が私を知っている理由について何かしら説明がなされるのだとばかり思っていたので、私達もお友達だよね、きみのことなんて呼んだらいいかな、とでも言いたげな彼女の物言いは、尚のこと私を混乱させた。すわ不審者と遭遇かという時に、何と呼ばれたいかなどと考える余裕があるはずもない。更に言うならば、素性も知らない女相手に、ただ名前を呼ばれるのさえ嫌だというのが本音だった。けれども小心者の私が自身のストーカーかもしれない人物にそんなことを伝えられるわけもなく、かろうじて伝えたのは、瀬波で結構ですというなんともおざなりな返答だった。いかにも困窮していますといった体の私を見て、彼女はまたしても、人懐っこい笑みを浮かべた。頬袋いっぱいにとんぐりを詰めたリスのようだと思つたのを、今でも鮮烈に覚えている。

そんな風にして、私は彼女と出会った。出会ったと言っても、事情を省きに省けば「電車で向かいの席に座った人に話しかけられた」というだけの話であつて、お伽話のように壮大な出会いでもない。その時の会話はそこできめきに満ちた出会いでもない。その時の会話はそこで終わってしまったし、そこから私達の関係に何か発展があつたわけでもない。もつと言うならば、私は、今現

在も、彼女のことを信用しているとは言えなかつた。

先輩は決して自身を語らない。饒舌であるにも関わらず、年齢や住所はおろか、名前さえも私には告げない。「先輩」という呼称だつて、一年生の私に面識がないのだから当然上級生であろうという推察に基づく、同意を得ていない渾名のようなものだ。ただ、毎朝こうして出会い、同じ挨拶をして、私の顔を見つめて感想を述べては、自身の背後に広がる海を眺める。それが先輩のルーチンワークであり、私知っている彼女の全てだった。そんな人を、どうして信用できるというのか。

そもそも私にしてみれば、先輩が乗ってこなければ、百歩譲つて向かいの席に座らなければわざわざ山中の駅まで歩いて行く必要もないわけで、その上人見知りの私に毎朝話しかけてくるだなんて、利点が失われたところか、欠点が増えまくっている。朝から軽い登山と不審者との会話を労力を要するせいで、私のスカートまわりはやや緩くなりつつあつた。友人から「綾、なんかやつれてない？」と訊かれたことも、一度や二度ではない。ここ数日の苦労と心労の種である先輩を、恨みこそすれ、信用する道理などどこにもない。好きでない、信用してない、どころか、苦手意識に近い感情を抱くこともあつた。

先輩はといえば、そんな私の懊悩を露ほどとも知らず、今日も今日とて海を眺めている。顔を近づけ過ぎているのか、黒いフレームと窓とがぶつかり、時折かちやかちやと音を立てていた。もうすぐ、消波ブロックが密集する地点に差し掛かる。先輩もそれを察したのか、クリスマスイブの子供のように目を輝かせた。横顔と、車窓に反射する顔の両方に、隠しきれない喜びが広がる。私も少しだけ左側にずれて首を伸ばし、今朝二回目になる消波ブロックと海を見つめた。静かな車両の中に、言葉にしないふたりの喜びが溢れる。

私が先輩を強く拒絶できない理由が、これだった。おそらくは私と共通の趣味を持つている先輩と、自身の趣味や価値観、今まで見てきた景色を語り明かしたいという願いが、心の奥底で静かに燃えていた。言葉にすれば彼女は私の審美学を理解してくれるという予感が、私を今日もこの環状電車へと乗せる。生来の人見知りの性格が所以して、なかなか実現されそうもない願いだけれど。それでも、私と同じように海を愛するこの人を、私は、嫌になることができないのだ。

気がつくとも中心街が近くなつていたようで、開いたドアから同じ制服を着た学生達に乗ってきた。途端に車内は人で埋め尽くされて、向かいの窓に広がる海は、まばらにしか見えなくなった。無論、その前に座っている先

輩の姿も。私に人波を眺める趣味はないし、親しい友人の大半は自転車で通学しているので、これといった話し相手もない。仕方なく鞆から文庫本を取り出して、擦り切れたページをめくることにした。幾度となく読み返したさして興味のない内容を、視線の先で追いかける。政治を解さない牧人は、今日も悪逆の王に憤っていた。

怒れる牧人が濁流の前に膝を突いた頃、電車は学校の最寄駅に到着した。立っていた者は吊り革の手を離し、座っていた者は鞆を手にしち上がって、足早に降車口へと向かって行く。私も例外なく、出口へと向かう。

ふと気になって、後ろを振り返る。先輩が座っていた席には、既に彼女の姿はなかった。おそらく、反対側の降車口に向かったのだろう。会話が飛び交う人混みの中で、孤立した個人でいることは憂鬱だ。こういう時ならばまだしも先輩と話す気にもならないのに、そんな時に限って、先輩の姿は近くにはない。つくづく空気の読めない人だ。

腕時計を見ると、始業の十五分前を指していた。

\*

下校のベルを背に改札をくぐるのと、電車がホームに入ってくるのがほとんど同時だった。扉が開くのを待って、今朝と同じ席に座る。橙色に照らされた車内にはまばらで、遠くからは部活動に動かしむ生徒の掛け声が聞こえていた。行儀が悪いと思いつつも、ローファアを脱いで膝を抱え込む。褒められたものではない素行を誰も咎めないのは、きつと、声をかけるのを躊躇われるくらいに、私の目元が赤く腫れているからだ。

本当ならば、私も学校に居残っているはずだった。図書館の隅で本を読むなり、教室で友人と歓談するなりして時間を潰して、帰りにはどこかで買い食いなんかしたりして。ありきたりで充実した女子高生の放課後を送る予定だった。学校を出る前に友人に謝罪と共に先に帰る旨を伝えた携帯は、以降折り畳まれたまま、一度も震えていない。

間も無く発車することを告げるアナウンスが、無人のホームに響く。私の頭の中は、今すぐ発車してくれという願いでいっぱいだった。こんなところを知人に見られるのは、学校に顔を出せないどころの話ではない。きつとあの女は電車の中で膝を抱えて泣いていたと吹聴されるだろうし、よしんばされなかったとして、そんな情けない姿を晒した手前、どんな顔で過ごせばいいのかわからない。早く動け、と繰り返す私の視界の端に、見慣れた人影が映った。

ああ、この人は本当に、空気が読めない。

いつのまに入ってきたのか、少し離れたところに、先

輩が立っていた。私が彼女を認識したことに気がついた先輩は、首をちょこんと傾げて、いつもと同じ笑みを浮かべた。

「こんばんは、瀬波。」

きみの顔を見ているとお腹が空くな、と先輩は微笑み、私は泣き顔を隠すように、重ねた腕に顔を埋めた。

はつきりとコミュニケーションを取らない意志を表した私をよそに、先輩はローファアを鳴らして近づいてくる。足音はすぐ近くで止まり、しばらくの間、沈黙が続いた。

ははあ、と、先輩の声がやけに明瞭に響く。

「フラれたんだな、きみ。」

ただ事実だけを述べる淡々とした声色に、ずきりと心臓が痛む。水でも埋め込まれたみたいに胸が冷たくなって、思わず顔を上げて先輩を睨んだ。いつもよりも少し近い場所に立って、顎に手を当てた先輩は、その宝石みたいに温度のない両目で私を見下ろしていた。

「凶星か。すると、やっぱり瀬波は幸薄なわけだ。」

何故だか満足そうにそう言って、先輩はいつもの席に座った。私と海とのあいだ、彼女の定位置に。機を見計らったみたいに、ドアが閉まって電車が動き出す。振動する車内で体幹を保つ気力すらなく、揺られるがまま、窓枠に側頭部をぶつける。

ラブレターで体育館裏に呼び出したなんて、我ながらありきたりだと思っけれど。

「だとしたら、なんだっていうんですか。私が失恋して、面白いですか。不幸な人間よりは幸福だって、自分を慰めたいんですか。」

私はまくし立てて、先輩は何も言わなかった。まるで私から語り出すのを待っているみたいに、眼鏡の奥から私を見つめていた。スカートから覗く白い脚が、逆光を浴びて暗いオレンジ色に染まる。沈んでいく太陽を背負った先輩が眩しくて、なんだか後光みたいに見えるのが腹立たしくて、思わず顔を顰めた。

「……中学二年生の時、隣の席だった子のこと、好きになっただけです。初恋、でした。」

顔を顰めたまま、先輩の姿をぼやかせたまま、ぼつりぼつりと語り出す。泣かないようにゆつくりと、まるで他人の話をするみたいに無感情に。起承転結の決まった話を読み上げるみたいに、淡々と言葉を紡ぐ。知り合っていない、正確にはおそらく知り合っているともいえないような相手に失恋の話をするなんて、我ながらどうかしている。この人が周囲に言いふらすかもしれないし、指をさして笑い私を馬鹿にするかもしれないのに。だけど、今は、それでもよかった。とにかく後腐れのない誰



かに全部話して、心を楽にしたかった。何故だか、先輩は私を傷付けないだろうという独りよがりな予感があったことも、私の独白を助長した。山奥で叫んだり、海に手紙を流したりするのと似ている。レスポンスなんか求めないから、ただ、誰かに知ってほしかった。私が傷ついていることを。傷付いた私の心を。恋に挑んで敗れた私の顛末を、たった一人の誰かに聞いてほしかった。

ただ語るだけだと割り切りながらも、じわりじわりと涙が滲む。自分の声が鼻声まじりになっていくのがはつきりとわかって、顔が羞恥で赤くなる。鼻をかもうと一度言葉を切った私に、先輩がおもむろに言った。

「瀬波、その話長い？」

「……は？」

先輩が何を言ったのか理解できず、思わず、上ずった声が漏れる。私の耳が確かならば、この人はたった今、私に尺の長短を尋ねたようだったけれど。つい先ほど失恋したばかりで失意に暮れるこの私に、決心して全てを話し楽になろうとしたこの私に、あろうことか、話の長さを聞いた気がしたけれど。

「いや、申し訳ない。なんか急に瀬波が語り出すから私も面食らっちゃったんだけど、語りたいお年頃なのはわかるんだけど、私としては瀬波の好きな人とか好き好きエピソードとかフラれた理由とか、心底どうでもいいっていうか。今日の夜ご飯のおかずよりもどうでもいいっていうか。話の前後がだいたい予想できるだけに、眠くなってしまふ節がないと言えは嘘になってしまふし。」

湯水の如く列挙される酷い言葉の数々に、途中から脳が理解することをやめていた。先輩はいえは、本当に困っているらしく、苦笑らしき笑みを浮かべている。先程まで胸の奥で渦巻いていた悲しみは、なべて先輩への怒りへと変貌した。垂れかけていた鼻水も、滲んでいた涙も何処かへ引っ込んだ。先輩は私を傷付けないでなんて何の根拠もない確信を抱いていた数分前の私を、思い切り殴り付けたい衝動に駆られる。思い返してみれば、確かに先輩は「何があったのか聞かせてほしい」なんて一言も言っていない。黒々とした先輩の瞳がこちちを見つめているのを私が勝手にそう解釈しただけであって、いつも通りの視線だったと言われれば、そうだったかもしれないと思えてくる。であれば先輩にとって私は、本人の言うように、突然求められてもない身の上語りをはじめた自己中心的な女だ。そう知覚した瞬間、もともと赤かった顔が、もっと赤くなるのがわかった。今が夕日の差し込む時間であることに心から感謝せずにはいられない。恥ずかしさを誤魔化すように、先輩に怒りをぶつ

ける。

「だとしても、知人が泣きながら話し出したら黙って最後まで聞くのが人情つものでしょう。先輩は本当に人間ですか？」

酷い、違つたらどうするの、と先輩は笑い、私は唇を尖らせて、酷いのはあなたですと訴えた。

私の真似をするように、今度は先輩が膝を抱える。甘える子供のように首を傾げながら、上目遣いで私を見やる。

「私はね、瀬波。瀬波が私以外に泣かされた話とか、べつに聞きたくもないんだけど。でも瀬波が私に聞いてほしいって言うなら、寝ないように努力して聞いてあげる。私はきみのことが、ちょっとだけお気に入りだから。」

いつもの笑みを浮かべた先輩は、貴族のように優雅で、これ以上なく傲慢なことを口にした。唯我独尊の字が透けて見えるその笑顔に、憤る気力すら湧かず、ただ深いため息が漏れる。椅子に深く座り直して、頭痛に耐えるように頭を抑える。

「……見て、瀬波。日没だよ。夜が来ちゃう。セリヌンティウスは間に合ったかな。」

先輩の言葉に吊られて後ろを振り向くと、遠くに横たわる水平線に、太陽が吸い込まれていくところだった。黒々とした海に明るい太陽が飲み込まれていく様はまるで捕食のようで、ある種グロテスクですらあった。そんなに長い時間この先輩と談話していたかと車内を見回すと、すでに中心街は遠く過ぎたらしく、電車に揺られているのは、私と先輩のふたりだけだった。

「瀬波、きみ、乗り過ぎしたろ。」

「……あ」

先輩の言葉に、思わず口元を抑えた。そうだ。海が後ろ側に見えるということは、既に電車は街の西側を走っている。落日を迎えるほど長い時間が経っているということから、おそらく、本来私が降りるべき駅はとうに過ぎていだろう。初めて一人で電車に乗って、景色に見惚れて降り損ねた小学生のあの日から、およそ十年ぶりの乗り過ぎだ。体中を強い脱力感が襲い、「厄日」の二文字が頭の中に点滅した。

「何もかも終わったみたいなの顔をしなくても、環状電車なんだから、ずっと乗ってればまた同じ駅に戻ってくるよ。人生とは違つてね。」

からかうような口調で含みのあることを言って、先輩は抱えていた膝を離し、その脚を組み直した。

「こんなに長い時間ふたりきりでいることなんかもうきつとないんだから、瀬波はもっと私と話せばいいよ。訊きたいこと、知りたいこと、沢山あるんでしょ？」

言い終わるか、言い終わらないかのうちに、電車がトンネルに差し掛かった。狭い車内は轟音で満ちて、何も言わない先輩と、何も言わない私との間を埋めていく。黒瑪瑙のような双眸だけが、ただ私を見つめている。この路線、トンネルなんかあったっけ、と思う暇もなく、短い暗闇の終わりが訪れた。

少し迷って、口を開く。

「……そりゃあ、沢山ありますけれど。」

突然親しげに接してくるようになった、素性の知れない人物相手に、尋ねたいことがないという方が嘘だ。先輩には訊きたいことが山ほどあるし、話したいことも、少しだけ、ある。例えば、海の話とか。

けれど、いざ訊きたいことがあるのだろうと訊ねられると、何も言えなくなってしまうのが小心者の悲しい性だ。知りたいことが多すぎて、何から尋ねていいものか決まらない。私は先輩に、殊の外関心を抱いていたようだ。

「訊けば正直に答えてくれるんですか？」

「気が向けば、ね。私が答えたいと思うような質問だけしてくれば、きつと全部に正直に答えるさ。」

曖昧に笑って、先輩は頰杖をついた。今の今まで私に名前すら教えてくれなかった人が、本当に、質問に応じてくれるんだらうか。だとすると尚更、何を尋ねればいいのかわからなくなってくる。貴重な機会を、無駄な質問で浪費したくない。真剣に考え込む私を、先輩は二足歩行を覚えたばかりの子供を見るような、あたたかくて無感情な眼で見つめていた。

「えつと……じゃあ、一つ。自己紹介してもらってもいいですか、先輩。」

私は俯しがちにそう言って、先輩はぱちぱちと目を瞬かせた。

「私、先輩のこと何も知りません。名前も、年齢も。そういう人と仲良くするのは正直少し怖いですから、教えてもらえると助かります。……あなたが、いったい誰なのか。」

ちらりと先輩の表情を伺うと、鳩が豆鉄砲を食らったような、素つ頓狂な顔をしている。そんなにおかしなことを言ったかと自分の言葉を反芻していると、先輩が小さく溢す声が聞こえた。

「……気付いてると思ってた。」

気付くって、何に。凸レンズの奥の目は、光の反射でうまく見えない。少し不自然な間があって、先輩は意味深に微笑んだ。通学鞆を座席に預けた先輩は、静かに立ち上がり、緩慢でも機敏でもない仕草で私に近付いてくる。車両の端と端、およそ一メートルから縮まることの

なかった私達の距離が、一步一步と縮まっていく。私の前で立ち止まった先輩は、髪を耳にかけながら前屈みになって——私の眼鏡を、器用に外した。すぐ近くにある先輩の顔が、ぼやけて認識できなくなる。やけにはつきりと響く声で、先輩が告げた。

「私はきみ。瀬波綾だよ。きみは私ではないけどね。」

そう言って微笑む先輩の顔は、やっぱり、小さなリスによく似ていた。

\*

「船がゆく。すると水面に、白い足跡のようなものが残る。そうしてできたそれを、滯という。私はそのようなものだ。瀬波綾というきみが、この電車に残していった未練。」

初めて私の隣に座って、いつものように脚を組みながら、瀬波綾は——私を名乗る彼女は言った。

曰く彼女は私で、けれど私は彼女ではない。

「まあなんというか、きみにとってはネタバレになるけれど。直属の人生の先輩からのありがたいお話だし、そこは割り切って聞いてもらいたいんだけどね。」

そう前置きをして、彼女は自己紹介を始めた。あるいは私への、ありがたい説法を。

「きみ、このあと二年間と少し、ずっとこの電車を使うことになるわけだけど。思春期真っ盛りのきみが、さっきみたいにここで泣いたりするだろ？ そうやってこの電車の中に蓄積されていった感情が、私。今のきみに感化されて、人形を得た形なきもの。」

だからきみにとっては、私は少しだけ未来人ということになるかな、と先輩は立ち上がり、私は視線だけでそれを追った。

未来の私が残していった、凝り固まった感情や、未練の欠片。それが、先輩。瀬波綾の側面であり、瀬波綾のすべてではない彼女の姿。にわかには信じられない話だったけれど、不思議と納得している自分がいた。ストーリーカーよりもそっちの方がマジだと思っ自分も。

「何だか、夢のような話ですね。」

「感情電車だからね。長く乗ってぐるぐると回ってれば、不思議なことだって起こるさ。瀬波は毎日毎日、遡巡してたんだらう？ この電車みたいにさ。」

先輩の話は、ふざけているのか本気なのか、含蓄があるのかまるでないのか、判然としない。ともすると、そのどちらでもあって、どちらでもないように思えてくる。

思いを乗せる、感情電車。レールから外れる事はできず、今日も同じ場所を私たちのように回り続ける。

「……先輩は、どこへ行くんですか。」

「どこへだって行けるさ。この環状の中でなら。私はこ

ここにいて、ここにしかない存在だから。」

唯一無二なんだよ。きみのコピーに過ぎないけどさ。悪戯っぽくそう言つて、先輩は指先で吊り革をなぞつた。

「瀬波。返すよ、これ。これがないとよく見えないんだろ。」  
外した時と同じように、器用に私に眼鏡をかけながら、先輩は言う。私を見下ろす先輩の目が、心なし、名残惜しそうに見えた。夜明け前の月のように、夕焼け小焼けを聞く子供のよう。つめたい黒瑪瑙のようだと思つていた瞳が、いまは不思議と、暖かさに満ちているように見える。私はこの顔を知つていた。言葉にできないままに惜別を抱く、女の顔。いつか鏡の中に見た顔。

「……お別れですか。」

「おかしなことを言うな。言つただろ、私はきみだ。きみは私ではないけれど。」

それじゃあ、と先輩は微笑み、私は笑わなかつた。

「さようなら、瀬波。」

\*

車窓の向こうに、消波ブロックが並び出した。遮るもののない視界に、白く美しい水平線が光る。

あの日から、一度も先輩には会つていない。先輩の言うことを全て信じるのならば、彼女の消滅は、それすなわち、いずれ抱える私の未練の消失に繋がるのだけだ。彼女ともう会話を交わせないことを、あのおかしな挨拶をもう聞けないことを、少しでも残念に思う自分もいた。せめて、一緒に海の話をしたかった。人とは少しだけ異なる趣味嗜好について自分と語り合うというおかしな経験を、どうせならばしてみたかった。あんなに親しげに振る舞つておいて、結局私は、先輩のことを何一つ理解できていない。隣に並んだのだから、ほんの少しの間だけだった。

先輩との別離を惜しむ私の気持ちが未練として数えられるのならば、こうして悩む私の気持ちも、いつかは人の形をとるのだろうか。そうしてまた、新しい未練を産む。同じことを繰り返すそれは、まるで、環状電車のように。先輩のような言い回しをするのならば、人生そのものみたいでもあつた。どこにも行けず、何にもなれず。ただ感情でしかない、環状に囚われた私の妄執。

これから二年と数ヶ月、私はどんな未練を作るだろう。嚙下できない感情を、どれだけ抱えることだろう。過去への失恋と未来との惜別を経て、これ以上に度し難い感情なんて、もしかすると金輪際抱かないかもしれない。あるいは、今の私には想像もできないような出来事が、待っているのかもしれない。先輩との出会いがそうであつたように。けれどどちらでも構わなかつた。

最寄駅から電車に乗つて、車窓の景色と車内の空気を

独占するルーチンワーク。そう簡単に他人に妨害させはしない。私の慣習を崩せる誰かなんて、同じく私であつたあの人以外には、そうそういないのだから。

電車が中央街に差し掛かり、車内は人で埋め尽くされて、車窓の景色も、その前の席も、まばらにしか見えなくなる。掌の中では、今日も牧人が非道の王に怒つてた。